2024年（令和6年）
4月号（No. 947）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

異常続きだった2023年の夏 その気象特性と猛暑の要因を探る

山岳気象予報士　猪熊隆之

「歴代と比較しても圧倒的な高温で、異常気象だと言える」と気象庁がコメントした昨年夏の猛暑。我々登山者にとっても少なからぬ影響があったが、その気象特性と要因はどこにあったのか……。山岳気象専門の予報会社を経営、気象予報士として多くの海外登山隊に情報提供している猪熊会員に解説してもらった。

「歴代と比較しても圧倒的な高温で、異常気象だと言える」。これは昨年8月28日、気象庁の「異常気象分析検討会」（以下、検討会）で結論づけられた内容だ。この表現に集約されるように、異常な猛暑に見舞われた2023年夏。その特徴と要因などについて私の見解を述べさせていただく。

昨夏の異常性について

2023年夏の全国の平均気温は、1898年の統計開始以来、最高を記録した。東京や京都、仙台など各地で猛暑日日数の記録を更新するなど、広い範囲で継続的に猛暑が続いたのが昨夏の特徴である。東京では猛暑日だけでなく、真夏日、真夏日連続日数、熱帯夜の記録もこれまでの記録を塗り替えた。昨年の暑さは、7月の東～北日本の太平洋側中心の猛暑と、8月の日本海側と北日本中心の猛暑とに分けられる。

◆7月の東・北日本の太平洋側中心の猛暑

7月は、太平洋高気圧の中心が日本の南東海上にあり、梅雨前線は7月中旬まで日本海から北日本に停滞することが多かった。このため7月上旬には九州北部で、中旬には秋田県で記録的な大雨になった。これまでの猛暑年は、梅雨明けが平年より早くなる年が多かったが、昨年は平年並みかやや遅くなったにもかかわらず、猛暑になった。日本列島は高気圧の北側に位置したため西風が卓越することが多く、山越えのフェーン現象となる関東から東北の太平洋側で記録的な暑さになった。

◆8月の東・北日本の日本海側中心の猛暑

上旬から中旬にかけて、西日本付近に低気圧や台風が接近することが多く、東高西低型の気圧配置となって南東風が卓越し、日本海側や京阪神地方で猛暑になった。

中旬以降は高気圧が北上し、北海道最北端の稚内市と同じ北緯45度付近に位置するようになり、東風が卓越した。このため奥羽山脈や越後山脈を越えた風が吹き降りる新潟県から北の日本海側でフェーン現象となり、新潟県では、8月下旬に5日連続全国1位の高温を記録。北海道では5日連続で観測史上最高の気温を更新するなど、新潟県と北日本の日本海側で記録的な猛暑が続いた。

猛暑の要因について

目　次

異常続きだった2023年の夏
その気象特性と猛暑の要因を探る …1
『かながわ山岳誌』
出版記念講演会を開催 ……5
未踏峰フォレソビ北壁に挑戦するも標高6150ｍで敗退 ……6
第13回登山教室指導者養成講習会を小諸市と水ノ塔山で開催 ……8
山の名著再読 ……10
東西南北 ……12
支部だより　宮崎支部 ……13
図書紹介 ……14
会務報告 ……15
ルーム日誌 ……16
新入会員 ……16
INFORMATION ……18
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

図１　2023年7月の平均的な気圧配置

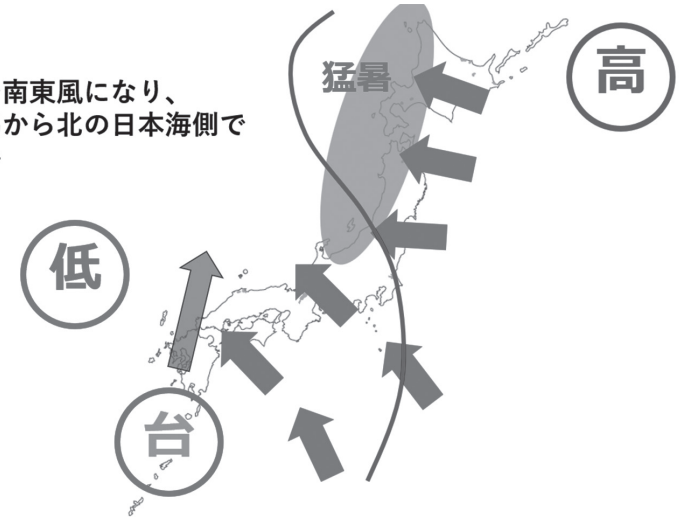


図２　2023年8月の平均的な気圧配置

猛暑の要因として、気象庁の検討会では、「太平洋高気圧が記録的に強まったこと」としている。太平洋高気圧が強まると日本付近では好天が続き、気温が上がる傾向にある。昨夏はそれに加えてチベット高気圧の勢力も強かった。

昨夏はそれだけでなく、日本近海の海面水温が高く、特に三陸沖では平年と比べて5℃以上も高かった。このため通常なら日中、海からの風で気温の上昇が抑えられる仙台市など東北の太平洋側では、海風が吹いても気温が下がらなかった。また、前述のとおり7月は東・北日本の太平洋側で、8月は北日本を中心とする日本海側でフェーン現象となり、それが長く続いたことも記録的な猛暑に強く影響している。地球温暖化によって地球全体の地上付近の大気が温められていることに加えて、このような要因が重なったことが記録的な猛暑につながった。

昨夏は、ペルー沖の海水温が平年より高くなるエルニーニョ現象が発生している。通常、エルニーニョ現象の年は北日本を中心に冷夏になりやすいが、今年はエルニーニョ現象にもかかわらず、インドネシア近海の海水温が平年より高く、北日本を中心の猛暑になるなど、これまでにない特異性が見られる。

2023年夏の北アルプスにおける気象特性

図3から図5は、槍ヶ岳山荘などを経営する槍ヶ岳観光㈱に提供していただいた、5時と14時の槍ヶ岳山荘（3080m）と南岳小屋（2980m）における月平均気温、および日本山岳会上高地山岳研究所における日最高気温と日最低気温のそれぞれ月平均値の推移である。これを見ると、いずれの地点も7月は2018年の方が高く、2023年はそれほど目立った高温になっていない。

それに対して、8月は上高地を除き2023年の高温が目立っている。また、9月は2012年以降という短い期間で見ても、特に槍ヶ岳山荘、南岳小屋で気温上昇の傾向が顕著であることが分かる。なお、上高地で2023年の気温がそれほど高くないのは、観測場所にも問題がある可能性がある。上高地の日最高気温、日最低気温、日平均気温を確認すると、日ごとの変化があまり見られない傾向があるので、高温や低温になりにくい環境に観測機器が設置されているのかもしれない。

図6は、標高3080mの槍ヶ岳山荘、約2450mの立山室堂、

約１５００ｍの上高地のそれぞれの日平均気温の推移を表わしたものである。日本付近の標準的な気温減率は１００ｍ当たり約０・６℃であるから、上高地よりも室堂は６℃前後気温が低く、槍ヶ岳山荘よりは３・５℃前後気温が高くなるはずである。それに比べて８月は、室堂の高温が目立っている。これはフェーン現象の影響を室堂が最も受けやすく、日射量が多いなどの理由が考えられる。いずれにしても、これらの観測データから、北アルプスは北部ほど、７月より８月の方が高温となった日本海側の気象の影響を強く受けていることが分かる。

猛暑の山への影響

猛暑の影響は平地だけでなく、標高の高い山にも及んでいる。雪渓が早くから縮小、消失したことで、雪渓から水源を得ている山小屋では水が得られにくくなったこと、新型コロナウイルスの「５類」移行によって登山者が増えたことなどから、北アルプスの山小屋では、深刻な水不足に陥った所が多かった。

近年、雪渓の消失や消耗が激しくなってきている。白馬大雪渓では、２０２３年は初めて８月中に通行止めになった。剱沢雪渓も近年、雪渓の消耗が進み、早い時期から雪渓が急激に縮小する年が頻発している。特に２０１６年と２０２０年は雪渓が激しく消耗した年であった。このことは、飯田肇・福井幸太郎（２０２１）「剱沢雪渓の最近の変動」（『登山研修』ＶＯ

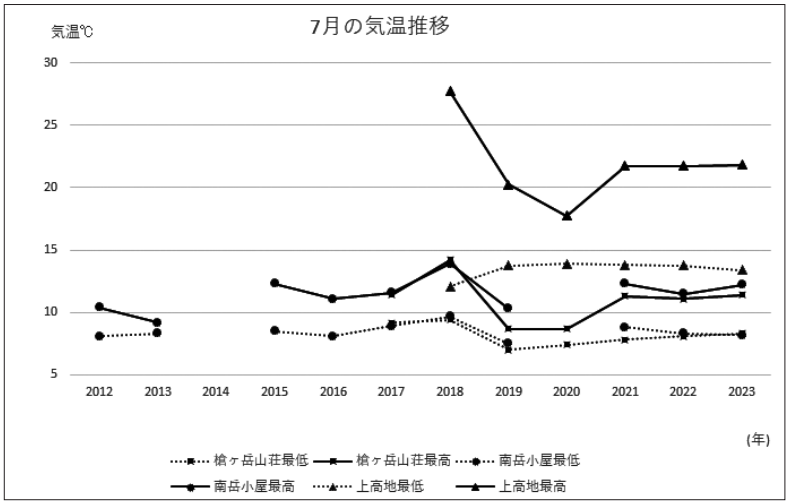


図3　槍ヶ岳山荘、南岳小屋における５時、14時の月平均気温と上高地の日最高気温と最低気温の月平均値（７月）

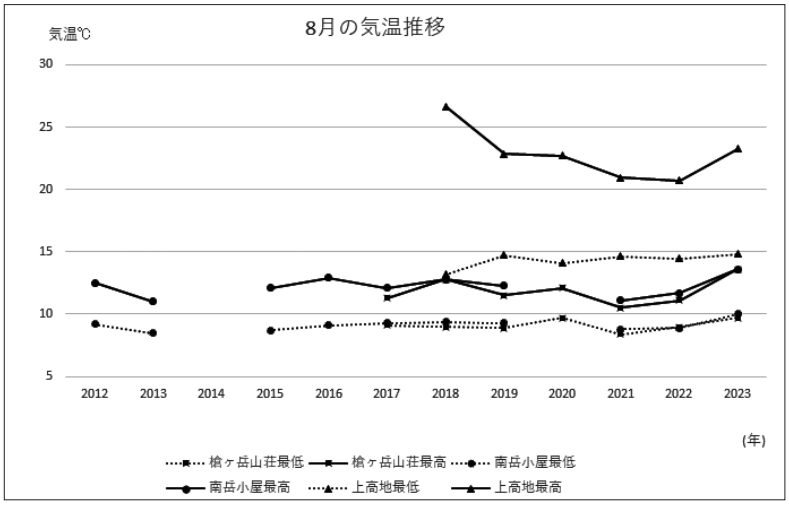


図４　槍ヶ岳山荘、南岳小屋における５時、14時の月平均気温と上高地の日最高気温と最低気温の月平均値（８月）

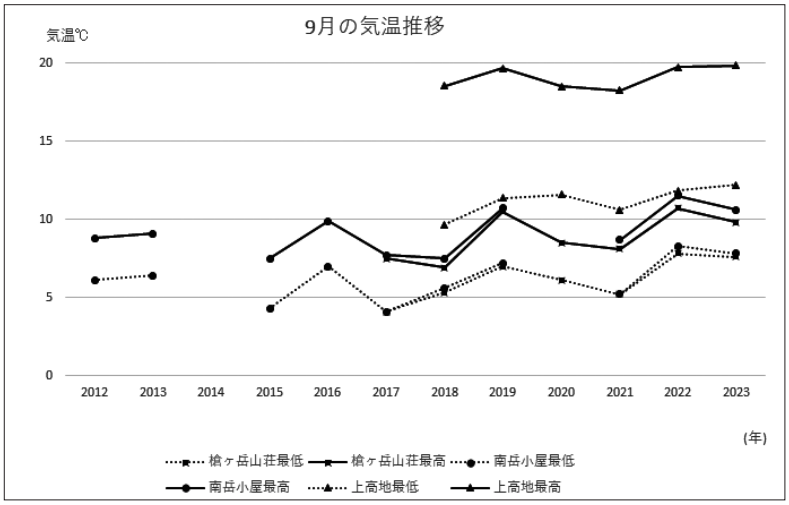


図5　槍ヶ岳山荘、南岳小屋における５時、14時の月平均気温と上高地の日最高気温と最低気温の月平均値（９月）　気象データ提供：槍ヶ岳山荘と南岳小屋は槍ヶ岳観光㈱、上高地は日本山岳会上高地山岳研究所

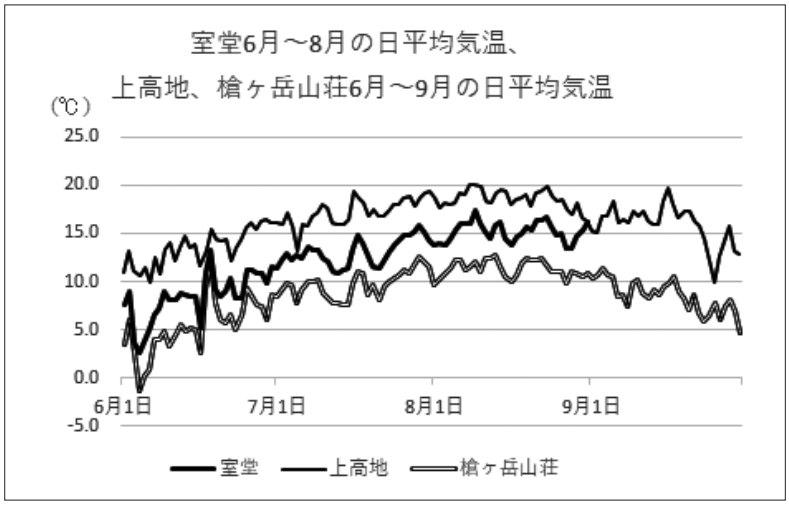


図6　2023年６～８月の日平均気温の推移　気象データ提供：上高地（日本山岳会上高地山岳研究所）、室堂（立山カルデラ砂防博物館）

が困難になるなど、アプローチで敗退するパーティも多く、登攀よりも雪渓の処理が核心となったようだ。

前述したように、昨夏の北アルプスにおける気温は、槍ヶ岳や上高地など南部では、８月を除いてこの数年では特に異常な高温ではなかった。それにもかかわらず雪渓の消失が早かったのは、２０２２／23年冬季の降雪量が少なかったこと、山雪型の気圧配置になる日が少なく、季節風が例年より弱い日が多かったことで、風による沢筋や風下側斜面への積雪の移動が例年より少なかったこと、３月の記録的な高温で融雪が早く進んだことなど、複数の要因が重なったものと思われる。

このほかでは、剱岳・源次郎尾根Ⅰ峰平蔵谷側下部壁の中谷ルートおよび中央ルンゼ付近が６月中旬に崩壊し、平蔵谷の下部が土砂や岩石に埋まった。また、長次郎谷でも９月に土砂崩落が発生したが、幸いこれらによる人的な被害はなかった。

L．36，１０８-１１４）に詳しい。

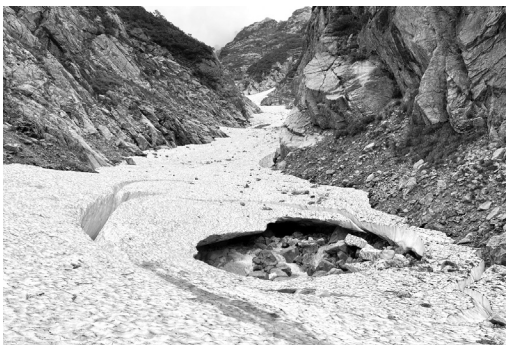
２０２３年は、長次郎谷雪渓や平蔵谷雪渓など剱岳東面の雪渓で早くからシュルントが開き、特に長次郎谷では８月上旬に雪渓がブロック状になって崩壊するなど、場所によっては２０２０年を上回るペースで消耗が進んだ。このため八ツ峰Ⅵ峰フェースに取り付く場合でも雪渓が途切れていて通過

今後の夏の気象

稚内市より北に太平洋高気圧の中心がある天気図を見た日、寒けを覚えた。通常、太平洋高気圧は日本の南海上にあり、今回の配置は40年以上、天気図を見続けてきた私にとっても初めて目にするものであったからだ。温暖化が進むと、５～６年に一度の頻度で、２０２３年夏を超える、これまでに経験しなかったような猛暑が発生する可能性がある。

山岳地域でもここ数年、雪渓の急激な縮小が見られる。これは夏の猛暑だけでなく、冬季の降雪量減少や、春の訪れが早くなり、３～５月の気温上昇と降雪量の減少、梅雨期の降水量なども影響している。雪渓は、将来的に登山道として適さなくなる可能性があるほか、熱中症のリスクも増していくであろう。それだけでなく、気候変動は植生や動物にも大きな影響を与えることが考えられる。登山者として、一人一人が山で学んだことを活かしながら生活様式を工夫して、少しでも温室効果ガスを排出しないような努力をしていくことが大切だと思う。

（㈱ヤマテン代表取締役）



長次郎谷出合付近で陥没した雪渓（2023年7月中旬）　提供：岩瀬智彦

崩落により下部が土砂に埋まった平蔵谷（2023年7月中旬）
提供：岩瀬智彦

REPORT

『かながわ山岳誌』出版記念講演会を開催

神奈川支部　渡邉正敏

２０２４年３月23日、神奈川大学横浜キャンパス３号館Ｂ１０４教室にて、『かながわ山岳誌』出版記念講演会を開催しましたので報告します。

『かながわ山岳誌』とは、神奈川県内の全てのピークと峠を踏査した記録ばかりでなく、関連する学術・文化情報を併せてまとめた本です（本会報９４５号６ページ参照）。このたびこの本の出版を記念して、講演会を実施しました。会員以外の一般参加者を合わせ約１５０名の出席があり、用意した会場がほぼ一杯となる盛況ぶりでした。

大勢の来場者でにぎわった講演会場

基調講演に先立ち、神奈川支部の込田伸夫支部長より主催者挨拶があり、続いて会場提供者の神奈川大学の山岳部から、活動報告をいただきました。

１番目の基調講演は、テレビでお馴染みの山と渓谷社の萩原浩司氏の「ウラヤマからヒマヤラへ―本が導いてくれた山の世界―」と題しての講演です。萩原氏の山登りは、幼少期の自宅のウラヤマから始まり、小学生のころは栃木県内の那須岳や男体山、奥白根山と続き、このころ手本にした一冊の本がアルパインガイド『日光・奥鬼怒・那須・塩原』で、登る前に知っておくべき知識を学んだとのことです。次には上高地・槍ヶ岳・穂高岳が目標となり、『日本登山体系』を熟読して、高校生のころは裏銀座から槍ヶ岳，岳沢から前穂高岳とレベルアップ、そして大学では雪山、岩登りとよりハードな体験をしていきます。

さらに、未踏峰への挑戦としては、『ヒマヤラ名峰辞典』からOutliner East（現地語でJanak Chuli）を選び出し、２０１３年に挑戦し、初登頂に成功しました。頂上で掲げた旗の寄せ書きには、時のＪＡＣ会長の森武昭氏（神奈川支部会員）のサインも見られ、今回との縁を感じる、まさに演題にふさわしい講演でした。

次の基調講演は、山の天気予報や講演で有名な気象予報士の猪熊隆之氏（㈱ヤマテン代表取締役）の「山岳気候の特徴」と題しての講演です。導入部では、雲とは風の収束により上昇気流が生じてできるもので、したがって山では雲ができやすいなどの話があり、続いて、神奈川県特有の季節ごと山域ごとの気象について解説がありました。

関東地方の東に高気圧があると、相模湾からの海風の影響でほかの地域で晴れていても神奈川県では曇るというのもその一例です。山岳遭難について、特に雷が近づいたとき、木の下や山小屋の軒先への避難は危険との話がありました。今後の山行に役立てられる山岳気象の講演でした。

基調講演の後は、講師おふたりと本の執筆・編集に携わった永井、田島、砂田、森（司会）の各氏によるトークショーです。特に執筆者からのヤブこぎなど山行中のエピソードや、収集したデータも費用面から制約があったことなど苦労話が印象に残りました。また、本を買った読者からは、詳しい地図情報やＧＰＳのデータを掲載して欲しかったとの意見があったことが紹介され、会場からも同意見の表明がありました。

参加者のアンケート結果でも、大変好評価をいただいております。この『かながわ山岳誌』出版プロジェクトは、支部設立記念事業として８年の歳月を費やして完了しましたが、この成果を励みに、支部の次なる活動につなげていきたいと願っております。

なお、この講演会は、２０２３年度支部特別助成金により開催されたことを付記しておきます。

REPORT

未踏峰フォレソビ北壁に挑戦するも 標高６１５０ｍで敗退

種石英典

本遠征の概要と結果

◆山域：ネパール、カンチェンジュンガ山群

◆遠征期間：２０２３年10月９日～11月18日

◆メンバー：種石英典、山本大貴

フォレソビ（Pholesobi、６６５２ｍ）は、北壁で有名なジャヌー（現・クンバカルナ）の隣にそびえる山である。２０２３年において、まだ誰にも登頂されていない山であるだけでなく、いまだ誰も登頂の試みをされていない、完全な未知の山である。本遠征はその山を、傾斜のとても強い北壁から山頂にダイレクトにアルパイン・スタイルで狙おうとしたものである。

結果としては、北壁６１５０ｍにて山本が肺炎並びに肺水腫になり敗退。ヘリコプターにてカトマンズに搬送され、遠征は終了した。

アラスカを思わせる強い傾斜とテクニカルな壁で、これを５０００～６０００ｍの標高でやるのはとても面白く、２０２４年、再トライを予定している。

登山行程

10月９日：日本を出国し、カトマンズ着

10日：登山許可手続きや準備

11日：車でカトマンズからタプレジュンへ

12日　タプレジュンからジープでセカトムへ

13日～15日（３日間）：キャラバン開始。トレッキング・ロードを歩きＢＣ（４１００ｍ）入り

16日　北壁偵察

18日～22日（５日間）：６０００ｍまで高度順応登山

25日～29日（５日間）：ＡＢＣ（５１００ｍ）建設。氷河での道造りと荷上げ

11月２日～７日（６日間）：フォレソビ北壁登攀。６１５０ｍにて敗退

８日～11日（４日間）：種石はバック・キャラバンでカトマンズ着

８日～13日（６日間）：山本は肺炎と肺水腫を患い、ヘリにてカトマンズに搬送され入院

18日：カトマンズを発ち日本に帰国。遠征終了

ジャヌー北壁と双耳峰のフォレソビ北壁（右）

アタック状況と敗退について

序章

アタック前のＡＢＣ建設中に、山本が風邪（または新型コロナか）に罹（かか）り、３日ほどダウンしてしまった。それが治ったということでアタックを開始したが、途中のお座りビバークなどで消耗し、病気がぶり返してしまったように思う。

１日目（５１００ｍ）

標高差１０００ｍの氷河を詰めてＡＢＣに入る。事前に道造りと荷上げは完了しており、それほどの疲労は感じない。目の前にそびえる北壁は傾斜がとても強く、山本と２人で「これは本物だ！」と狂喜乱舞する。この傾斜の壁を６００ｍ級でやれるのが嬉しい。

２日目（５５００ｍ）

ほぼ垂直の、とても傾斜の強い下部岩壁の岩と氷のミックスをすばらしいスピードで登っていく。５０００ｍ、６０００ｍでこのテクニカル・レベルはしびれる。しかし、登れども登れども、夜になっても、テントはおろか横になるスペースすら見つからない。結局、氷を削り出して腰掛ける場所を作成し、寝袋に入れず、足を空中に

取付点から見上げたフォレソビ北壁

投げ出したままの腰掛けビバークになった。

3日目（5800m）

お座りビバークで体力がかなり削られる。しかし、この日も昨日と同様の傾斜の強い壁を登り続ける。しかし、最後は少し傾斜が落ちてきて、アイス・ハンモックに雪を詰め、3分の1ほど空中に浮くがなんとかテントを張ることができた。この日から山本の調子が怪しくなってくる。

4日目（6050m）

上部は綺麗なアイスライン。山本の体調がどんどん悪くなってきた。荷物を担いでユマールすることもできなくなり。空荷でユマーリングし、後で荷上げを行なう場面も出てくる。

北壁下部岩壁の岩と氷のミックス帯を登る

5日目（6150m）

この日2ピッチ延ばし、この先のトラバースを見て冷静になって考える。これ以上先に進むと敗退も難しくなる。リードの倍の時間をかけて、死にそうになってユマーリングして来る山本を見ると、「これ以上無理だ。ここが潮時だ」と判断し、敗退を決める。この敗退時の気持ちは、ここで文字に表わすことは不可能である。いろいろな思いが交錯するなか、懸垂下降を開始した。

その後

山本はヘリにてカトマンズに運ばれ入院。肺炎と肺水腫を患っていた。種石は荷物をまとめ上げてBCを撤収、トボトボと帰路についた。

北壁の傾斜の強いセクションを登る山本隊員

遠征を振り返って

(1)北壁を登るという明確な目標がある以上、テントが張れないほどの傾斜が強い壁である可能性を考え、ハンモック、ポータレッジの準備と練習をしておくべきだった（ネパールに入った別の日本チームは、ちゃんとハンモックを用意していた）。

(2)もう少し意識的に休養を多めに取る。例えば、ABCへの移動が標高差1000mあるため、翌日はロープ・フィックス作業と休養も兼ねて1日ABCで滞在するなど、体調不良になるリスクを少なくする。

この2点を準備、意識しておけば、アタック中の壁の中でのお座りビバークを避けることができ、また、体調不良になるリスクを下げることができ、山本も体調良くアタックできたのでは、と思料する。

なお、病気から回復後、アタックするのが早過ぎたとは思っていない。なぜなら、山の好天がいつまでも続くわけはないし、遠征日程や食糧、経費など制約事項はいくつもある。回復したと思ったら、天気の良いうちにアタックするのは間違っていなかったと思う（標高を落として1週間休養も考えられるが、期間の制約があり遠征序盤でない限り現実的ではないと思う。また、ヘリ往復でカトマンズで静養するというのも経費的に厳しい）。

その他特記事項

＊日本の円安とカトマンズの物価高を合わせて、遠征費は高騰の傾向にある。100万は予算として見ておくこと。

＊入院費やヘリ代金も相応に高騰しており、海外用山岳保険はしっかりと、良いものを準備しておくべき。

＊他方、ネパールの発展は目覚ましく、街ではタクシーの配車アプリが使えたり、以前は歩いてアプローチしていた所も車やジープが通って、アプローチ期間を短くすることが可能。ひと昔前よりキャラバンもだいぶ快適になり、山が近くなったと思う。

REPORT

第13回登山教室指導者養成講習会を小諸市と水ノ塔山で開催

主催：（公社）日本山岳会　支部事業委員会／後援：（公財）安藤スポーツ・食文化振興財団

3月18日(土)

会場：安藤百福記念アウトドアアクティビティセンター　カンファレンスホール

◆講義1「最近の遭難事故と救助活動」（講師：長野県警察山岳遭難救助隊隊員）

◆講義2「日本に氷河がある！―雪の壁から氷河まで」（講師：飯田肇〈本会副会長〉）

◆講義3「チーム登山と初級の雪山技術」（講師：松原尚之〈本会YOUTH　CLUB委員長〉）

3月19日(日)

実習場所：車坂峠～水ノ塔山

◆実技講習「チーム登山と初級の雪山技術」（講師：松原尚之〈同前〉／西田由宇〈東海大学山岳部コーチ〉）

長野県小諸市において支部事業委員会主催の登山教室指導者養成講習会を開催した。本講習会は支部の活性化と次期リーダーの育成を推進するための施策として計画され、今回で13回目の開催となる。今回も（公財）安藤スポーツ・食文化振興財団の後援を受け、群馬、埼玉、千葉、東京多摩、山梨、越後の各支部から女性10名、男性8名、計18名が参加した。

日本山岳会の活性化・会員増強の方策として、支部山行が準会員や山歴の浅い会員の定着事業として注目されているが、山行の増加に伴い遭難事故の危険も増加している。また、地域の非会員を対象とした登山教室は、新入会員の獲得に寄与することから実施する支部も増えている。非会員を山行で引率するには安全管理はより重要で、そのために必要な知識と技術を持った指導者の育成が求められている。そのような背景から、支部事業委員会では登山の安全管理に必要な知識を持つ指導者の養成を目的として、この登山教室指導者養成講習会を継続実施している。

1日目は3講義を実施した。講義1「最近の遭難事故と救助活動」では、近年の山岳遭難事例を基に実際の救助現場の動画を交え山岳遭難の特徴を説明された。講義2「日本に氷河がある！―雪の壁から氷河まで」は、氷河の定義から始まり、氷河の存在確認調査の実体験を交えての講義は興味深いものであった。講義3「チーム登山と初級の雪山技術」では、実技講習で登る水ノ塔山の地形図や気象情報を基に、指導者として事前に調べ注意する事柄を学んだ。夕食後の懇親会では、支部間での情報交換も活発に行なわれた。

2日目は天候も良く、絶好の登山日和だった。チーム登山と雪山技術などのレクチャーを受けながら水ノ塔山を目指した。

（支部事業委員会　中村哲也）

これを機に各支部と連携を

松原尚之

数年ぶりに、支部事業委員会主催の登山教室指導者養成講習会に講師として参加させていただいた。初日の机上講習では、「雪山のリスク回避」というテーマで、ふだん雪山に出かけるに当たり、私自身がどのような準備をして登っているかということを中心にお話しさせてもらった。私が特に強調したかったのは、雪山（に限らず登山全般）を安全に登るためには、山に入る前の下調べや準備が何より大事ということだった。「下調べや準備」の中には、山やコースの下調べに始まり、天気や積雪状況のチェック、天気の判断、装備とウェアの準備、登山計画書の作成、体力の維持……等々、あらゆるものが含まれる。皆さん言われなくても分かっていることだと思うが、それを毎回の登山で徹底できる人は、私自身を含めてなかなかいないはずである。

山岳遭難救助隊員による机上講習

2日目の雪山講習は、水ノ塔山

で実施された。２月が記録的な暖かさと降雪の少なさで、雪がなかったらどうしよう……などという心配さえしていたのだが、幸い杞憂であった。今回ツボ足とアイゼンを履いて歩いたが、前半はワカンやスノーシューを履いた方が歩きやすいくらいの雪の状態だったと思う。次年度からはワカンと、それから雪崩ビーコン、ショベル、プローブといった装備も、装備リストに加えておいた方が良いと思えた。標高２２００ｍほどの水ノ塔山では、アイゼン歩行や雪上講習の練習に適した場所は少なく、それらの講習を期待されていた参加者の方には申し訳なかったが、滑落停止の形だけは講習させていただいた。機会があれば、改めてアイゼン歩行や滑落停止の練習をしていただければ、と思う。

水ノ塔山での松原講師による実技講習

今回の講習会に参加して、私にとっていちばん有意義だったのは、夜の懇親会を通じて、これまでお付き合いのなかった様々な支部の方々と知り合えたことである。私は現在、本会ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ委員会の委員長という立場で活動するなかで、とりわけ本部・支部ＹＯＵＴＨの交流に力を注いでいる。ここ数年で多くの支部の方とつながりを持つことができたが、本会33支部の中で私がお付き合いのある支部はまだ半分にも満たないと思われる。今回初めてお会いした支部の皆さんとも、これをご縁にこれからお付き合いを深めていけたらと考えているので、どうぞよろしくお願いいたします。

指導者養成講習会に参加して

埼玉支部　若林優子

先日、ありがたいことに登山教室指導者養成講習会に参加する機会をいただき、行ってまいりました。雪山登山における技術的なことの習得ばかりではなく、皆さんとの交流を通しての山の仲間たちのすばらしさ、また、自然の美しさや壮大さ、登山の楽しさを改めて実感した、学ぶことの多いとても貴重な講習会でした。

参加前は、同じ支部の方以外で特にお知り合いの方もおらず心細かったうえに、２日目の雪山実技講習などは、皆さんに遅れないか、何か迷惑をかけてしまわないかと緊張と不安でいっぱいでしたが、すっかり杞憂に終わりました。

講習では、登山道に入る前にウェアや手袋のレイヤリングやアイゼンの履き方、歩き方など、基礎のところから丁寧かつ分かりやすくご指導いただき、今までは自己流で行なっていたところもあったため、癖など改める良い機会でもあり、とても勉強になりました。特にアイゼンの履き方に関しては、いかに素早く装着できるようになるか、今後の課題となりました。また、ピッケルを使用しての滑落停止訓練、雪道のラッセルなどの練習を通し、正しい知識や技術は安全な登山には欠かすことのできないものであり、練習を重ね習得することが重要だと感じました。

天候は前日（１日目）の曇り空とは打って変わり晴天で、青空が広がっておりました。それだけで今回の登山がすばらしいことは確定しているのですが、それに皆さんとの楽しい会話、すれ違う登山者との温かな挨拶などが加わり、より最高のものとなりました。道中、徐々に眼下に見えてくる麓の街並みや頭をのぞかせてくる浅間山、雲の切れ目から姿を見せる富士山などに励まされながら、頂上に到達しました。すると、山頂から見下ろす風景は今まで以上に息をのむ美しさでした。一面の雪景色、浅間山の立ち昇る噴煙、遠くに連なる山並みに自然の偉大さ、壮大さを感じさせられました。

登りも楽しいものですが、下りもまた違った楽しさがありました。往路とはまた違った視点からの風景や徐々に近づいてくる下界の様子であったり、登りのときには見る余裕がなかった樹木や冬季における植物の様子などです。また、下山後に出会う最初の人工物に、無事帰って来たと感じる、なんとも言えない安堵感を味わいました。

今回の講習での学びを大切にし、これからの安全な登山の実践に活かしていきたいと思います。

連載■文庫本でも楽しめる

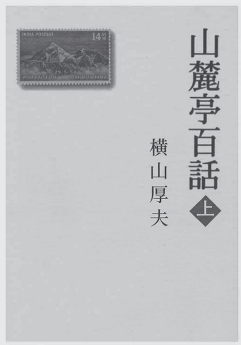
山の名著再読

⑮『山麓亭百話』（横山厚夫著・白山書房）

木根康行

横山厚夫さんの著作『山麓亭百話』は、キャッチコピー「登山の愉しさがよりふくらむ百のエピソード」にあるとおり、上・中・下の3巻から成る100のエピソードが盛り込まれたエッセイ集である。各巻の帯には次のような一文が飾られている。

上巻「山を歩き、本を読み、映画を見ることが大好きな著者が軽妙な文章で綴った山麓亭へようこそ。」／中巻「山へ行く前に、山から下りてきて、ちょっと寄り道しませんか。洒落た文章でおもてなしする山麓亭へようこそ。」／下巻「山岳図書や小説、映画やビデオ、切手や絵画、カメラや写真などを題材に、縦横無尽に軽妙な文章で繰り広げる『山麓亭』の世界。」



上巻／平成11(1999)年初版発行

まさにこれらのコピーが本書を物語っている。

横山さんは、低山愛好家として奥多摩や奥秩父、大菩薩、吾妻の山々によく通っておられ、ガイドブックや紀行をはじめ関係書籍も多数執筆・編集されている。私が登山を始めたころには、横山さんのヤマケイ登山学校シリーズ『低山を歩く』（1995年）を愛読していた。単なるハウツー本ではなく、低山の魅力と山のエッセンスを知ることができ、文中に登場する隠れた展望の山を拾って歩いた。

のちに古書店で手に入れた横山さん著の『登山読本』（1979年、山と溪谷社）では、時刻表の活用や写真、テレビ・映画なども登山の一つのパーツとして組み入れられており、まさに私にとってバイブルであった。

横山さんに初めてお会いする機会に恵まれたのは2003年、元図書委員長であった故三好まき子氏が北杜市のペンション「ロッジ山旅」で主催されていた「森山の会」に参加させていただいたときであった。低山山行の後の夜に、大森久雄氏と横山さんの話を聞かせていただく会で「森のはなし・山のはなし」から「森山の会」と呼ばれており、年2回ほど開催されていた。おふたりから出てくる話はまさに珠玉の玉手箱で、「この方たち、なぜこんなになんでも知ってるんだろう」と毎回、感じ入りながら聞かせていただいた。

横山さんは、本書の帯文にもあるとおり山岳図書だけでなく、私も好きな映画やカメラ、飛行機などにも精通しておられたので、趣味のお話もお聞きすることができた。また、深田久彌氏や藤島敏男氏、島田巽氏、望月達夫氏など古き良き時代の先達のエピソードも随分と教えていただいた。そんな横山さんの多彩なレパートリーの中から、とっておきの話を選りすぐり集大成されたのが本書の100のエピソードなのだ。

ベースとなったのは、雑誌『山の本』（白山書房）で1997年から始まった同名の連載「山麓亭百話」で、横山さん曰く「『山の本』に載るか判らないほど」書き溜められた未発表のエピソードが加えられている。連載を追い越しながら書いているうちに表題どおりの百話になったという。各エピソードの末には、登場する書籍も参考としてまとめられている。

エベレスト初登頂の記録映画のエピソード「WELL DONE の『エベレスト征服』」から始まる百話であるが、本書下巻が出て合計百話となった時点で『山の本』への掲載も終了となっている。

なお、横山さんの著書『山書の森へ』（1997年、山と溪谷社）も山書をテーマにしたエピソードを味わえる秀作で、併読をお勧めしたい一冊だ。

本書は残念ながら文庫本は出版されてなく、白山書房から上巻が1999年、中巻が2000年、下巻が2001年に、税別1400円で出版されている。中巻を除き絶版の模様なので、上・下巻は古書本を探してもらいたい。

（図書委員会委員）

⑯『風雪のビバーク』

（松濤明著・朋文堂）

松田宏也

「全身凍ッテ力ナシ、何トカ湯俣マデト思フモ有本ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」

昭和24（1949）年1月、季節外れの豪雨、ラジウスの故障で凍える体、横たわる友の姿。厳冬の北鎌尾根から槍ヶ岳を目指したふたりの命がまさに尽きようとするとき、松濤は手帳に記す。

読者の誰もが、この手帳に書かれた悲劇的な一文を忘れることはないだろう。

私には、この本の読み返しがつらい。松濤明という稀代のアルピニストの悲劇を、あろうことか1982年のミニヤコンカ遭難で追体験することになったから……。

「サイゴマデ　タタカフモイノチ、友ノ辺ニ　スツルモイノチ、共ニユク」

昭和35（1960）年初版発行

捜索時に発見された手帳に綴られた悲壮な覚悟。それはもがき苦しんだミニヤコンカからの下山の間、脳裏から離れず私を苦しめた。凍傷で真っ黒に変色した指と棒のようになった足。穴が開いた胃の痛みに耐えながらの下山。とうとう付いて来れなくなった友との別れ。独りで下山の決断。そのとき、松濤の覚悟が重くのしかかった。

多くの読者の心にも深く刻み込まれたに違いない。友の死が間近に迫りつつあるときに、はたして自分であれば、共に逝く覚悟を持つことができるのか。死は訪れるものなのか、それとも受け入れるものなのか。そして、遺書となった手帳には人の命の輪廻が、諸行無常として語られる。

「我々ガ死ンデ　死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入リ、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル。個人ハカリノ姿　グルグルマワル」

命の輪廻を記すことで、松濤は平穏な死を受け入れる覚悟を持ったのではなかろうか。最期まで冷静沈着に、命消える寸前まで己の生き様を貫いた松濤は、悲劇的な最期を遂げたアルピニストとして伝説となった。そして、加藤文太郎に続き松濤を飲み込んだ北鎌尾根は、岳人憧れのルートとなった。

だが、悲劇のヒーローという一面にとらわれず、冷静に松濤の登攀歴をたどっていけば、そこには信念を貫き山へ挑み続けた超人的な単独クライマーの姿が見えてくる。中学生（16歳）ですでに谷川や穂高で単独登攀を挙行、徒歩渓流会に入会後も数々の輝かしい登攀歴を刻むことになる。驚くことに入会後も単独行に強いこだわりを持ち、谷川や穂高、八ヶ岳、北岳での初登攀を成し遂げている。

一時期、学徒出陣で入隊、南方に派遣されるが無事に復員し、その後は水を得た魚のごとく再び山へ向かうことになる。また、会報を通じ会の発展的運営やアルピニズムに対する真摯な意見を多く投稿している。それにしても、戦前から戦後の物資が乏しい時代に、これほど頻繁に山に向かう気力と体力にはまさに脱帽である。早熟の天才クライマーであり、読み応えある文章を数多く遺し、アルピニズムを追求するその姿勢は、登山界に大きな影響を与えることになった。日本のアルピニズムの原点と原石がこの本にはある。

松濤の享年は26歳、私のミニヤコンカ遭難も26歳。不思議な縁となった。過去、遭難前に槍ヶ岳には西鎌と東鎌、ヴァリエーションの東稜を厳冬期に登ってきたが、北鎌はなぜか登る機会に恵まれなかった。1995年秋、シシャパンマ遠征の訓練として、5月に末端から北鎌を登り上高地へ下山した。手指もなく両足義足でよくぞ登ったものだと思う。加藤文太郎、松濤明を慕いながらの北鎌は、私にとって忘れられない登攀となった。

今回の再読は、ヤマケイクラシック（2000年）の『新編・風雪のビヴァーク』で行なったが、ヤマケイ文庫（2010年初版発行、税込み1100円）でも発刊されている。なお、遠藤甲太氏の解説によって松濤の単独初登攀の数々が明らかになったことは、新たな発見でもある。若い方にはぜひ読んで欲しい一冊である。戦争の時代にあってもひたすら山を求め、真摯に向き合った早熟のクライマーの思考と行動力を熱く熱く感じてほしいと思う。**（図書委員会担当理事）**

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

山岳写真家 手塚順一郎

牛丸 工

長野県大町市に、かつて手塚順一郎という山岳写真家がいた。山梨県出身の父・九造は熱心なクリスチャンで、松本で牧師を務めた。順一郎は東京の旧制中学を卒業し、山梨県で教師になり長野県北安曇郡大町（現・大町市）に移り住み.教師をするが、辞して東京日日新聞の通信員となり、山岳写真撮影に没頭した。生涯で唯一『山の寫眞のうつし方』を上梓した。病に伏せていた手塚のもとに刷り上がった本が届き、出版日の昭和7年7月30日、病の床で握りしめながら48歳の生涯を閉じた。日本山岳会には大正8年8月入会、会員番号691番であった。

彼の作品は多いとも少ないとも言われているが、大正から昭和初期にかけて北アルプス北部の白馬岳を中心とした絵葉書は、手塚撮影による作品が多い。絵葉書には誰々撮影と記載されていることがほとんどないので、一つ一つを『山の寫眞のうつし方』と照らし合わせていかないと、確定できない。手塚の写真が掲載されている主な書籍・雑誌は、大正9年12月18日発行『INAKA』Vol. 103に3点、『岳人』712号に2点、杉本誠著『山を愛する写真家たち』に4点、『信濃山岳会報』などがある。

焼岳の噴火口に立つ3人の登山者

大町對山館・百瀬慎太郎、燕の小屋・赤沼千尋、教育者・河野齢蔵らと親交が深く、皇族の登山に随行写真家として、大正6年8月の東久邇宮殿下の白馬岳、大正7年8月の久邇宮殿下、大正9年の朝香宮殿下の槍ヶ岳・常念岳、大正10年8月の朝香宮殿下の剱岳、大正15年8月の北白川宮殿下の針ノ木岳の撮影を担当している。いつごろから山岳写真を始めたのか不明なことが多いなか、初期の大きな仕事は大正4年と考えている。

大正4年6月6日朝、7時33分、大きな地震とともに焼岳が噴火した。噴火の前に、朝7時ごろから30分ほど地震があり、なかでも7時33分ごろの地震は大きく、上高地、白骨で大きく揺れた。焼岳南東斜面が亀裂して、7時35分、新噴火口から噴煙が昇った。噴火煙が起こり、梓川の対岸まで吹き下った。十数ヶ所から泥流が発生して中堀・下堀の沢を流れ、梓川を堰止めて池ができた。2時間後には下流の島々に流木が流れ着いた。できた池は松本小林区署（営林署）の上高地現地責任者・山崎守一に

山岳研究所　利用料金改定のお知らせ

いつも山研をご利用いただきありがとうございます。このたび、施設老朽化に伴う大型修繕への対応、および建物光熱費、リネンクリーニング代の値上がりなど諸般の事情に鑑み、2024年度のシーズンより利用料金の改定をさせていただくことになりました。会員および準会員の方は1泊4000円（前3000円）、会員以外の方は7000円（前5000円）とさせていただきます。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

なお、団体および平日割引などの詳細につきましては、令和6年4月1日以降の利用要領並びにホームページを参照願います。

山研運営委員会

よって〝大正池〟と命名された。

焼岳大噴火から1ヶ月後に火山調査隊が結成され、現地調査に入った。調査隊の正式名称は「震災予防調査会」で、隊長は当時日本の地震火山学者の権威、東京帝国大学の大森房吉理学博士を筆頭に、地元の行政・学校関係者ら29名が、当時上高地に2つあった宿泊施設の内、焼岳に近い上高地温泉を拠点に7月9日から調査を開始した。

ちなみに、もう一つの宿は奇しくも焼岳噴火と同じ日の6月6日に河童橋の脇に開業した養老館支店（現・五千尺ホテル。当時本店は松本駅前にあった）である。この調査隊に自費で参加した手塚順一郎は多くを撮影して、絵葉書で遺している。手塚の撮影した絵葉書の見分け方は写真下部の所に「大正四年六月六日爆発　七月九日大森博士踏査随行員撮影」と説明書きされている。今現在、この解説文のある絵葉書は10種類確認しているが、「大正四年六月六日爆発」という解説だけのものも含めるといったい何種類あるか、不明である。

この調査隊に参加したことを足掛かりにその後、山岳写真家としての地位を築いていくことになるが、手塚写真の代表作は何かと問われれば、やはり『山の寫眞のうつし方』の表紙になっている、焼岳噴火口の水蒸気が立ち昇り、人物が3人写っている写真ではなかろうか。この写真は絵葉書にもなっているが、3人は写真機に背を向けて写っているが、写真機の方を向いている写真も存在し、それは松本測候所の技手・大久保久寿のご子孫のお宅の写真帳にあった。

手塚順一郎を紹介するとき、多くは「大町市の」と、住居の説明をしている。筆者の手元に差出人手塚順一郎で、山梨県の知人に宛てた絵葉書がある。差出人住所は「信州北安曇郡陸郷村」となっている。陸郷村は大町市の南に位置し、昭和32年3月31日に池田町、明科町、生坂村に解体分割している。大町ではない。消印は不鮮明で年月日が不明であるが、絵葉書は差出し面の下3分の1に点線があるから、絵葉書の作成差出しは大正6年以前であることは明白である。写真は自分の撮影したものではなく、中村定吉撮影の槍ヶ岳である。おそらくこの時期はまだ手塚は写真を撮影していないのであろう。すると、本格的に写真家として活動を始めたのが、大正4年6月の焼岳噴火のころであろうという推測と一致するのである。

では、手塚の作品をどこに行けば見られるかといえば、いずれも常設はしてないと思うが、大町山岳博物館には遺族が寄贈しているので、いくつかあるはずであろうし、松本市立博物館には皇族方登山の写真が数点あるので、特別観覧の手続きをすれば閲覧可能となる。

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

宮崎支部
ウェストン祭記念山行／祖母山と赤川浦岳

4年ぶりとなったウェストン祭の記念山行は各支部自由参加となった。宮崎支部はAコースとして祖母山（1756m）を北谷登山口から風穴コースで山頂を目指し、下山は千間平への周回とした。そしてBコースに祖母山西側の赤川浦岳（1231m）に登った。

◆Aコース＝祖母山

11月4日㈯、最高の登山日和だ。今回は本部山岳祭のPJリーダーの坂井広志氏に宮崎の山を満喫してもらうすばらしい機会ともなった。紅葉の時期でもあり、駐車場は早朝から満車状態であった。北谷登山口から沢沿いの道を歩き、徒渉を繰り返す。ここ数日、晴天で岩のコケは乾燥ぎみで滑る心配はなかった。優しい木洩れ日が、色づく木々の間を照らす。踏み締める落ち葉の甘い香りや役目を終えてはらはら舞い落ちる葉に五感をくすぐられる。

1時間ほどで風穴のハシゴに到着。風穴の中を確認するのにヘッドランプで照らした。奥が気になるが狭所と暗所は苦手だ。その後ハシゴのある岩を登り、一気に標

Aコース・祖母山山頂での記念写真

高を稼いで稜線へ。この時期は霜柱が解け、泥濘を覚悟したが温暖化の影響もあり、汗ばむほどの陽気。霜もなく滑る心配はなかった。

絶景の展望岩場で高度感に浸りながらピラミダルな古祖母（ふるそぼ）、黒岳、親父岳、障子岳の烏帽子岩、天狗岩を望む。交代で写真撮影後、10時30分山頂着。風もない山頂からは阿蘇の高岳、根子岳、九重連山など360度の大パノラマが広がる。全員で記念撮影後、昼食団らんとなり、11時24分に下山開始した。25分ほどで国見峠、そして、三県境から千間平へと下った。

ここより上は紅葉の時期を過ぎていたが、5合目あたりから下ではきれいな紅葉も楽しめた。展望広場から九重連山、竹田市の街を眺めながら小休憩。傾いた日差しが紅葉を一段と引き立て、写真撮影につい足が止まりそうになるが先を急ぎ、13時43分、全員無事に登山口に着いた。

（風間恭子）

◆Bコース＝赤川浦岳

ウェストン祭記念山行のBコースは、祖母山の紅葉の中を散策する予定だったが、先行出発のAコース組を登山口に送った川越さんの情報で、登山口駐車場は道路も車がいっぱいで時間的に無理と判断。祖母山近く、南西に位置する赤川浦岳（1232m）に登ることになった。赤川浦岳登山口から山頂に延びる尾根道は大・小のピークがいくつもあるものの、高度差はわずかで快適な山歩きを楽しめる山である。10年以上前、「宮崎100山」完登を目指した恒吉さんご夫婦と雨の中を歩いた、思い出深い山だ。

登山口駐車場は以前と比べ西側を大きく切り開いて広くなり、そこから見渡す空は高く広く、阿蘇五岳を中心に雄大な光景が広がっていた。春にはアケボノツツジでにぎわう登山道を踏み締め、紅葉の木々を愛でながら山頂までは行かなかったが、尾根道のアップダウンをゆったりと楽しんだ。

三秀台に戻って昼食をとる。360度の展望の中、赤川浦岳の駐車場は遠目にも確認できた。ひめゆりセンターでAコースのメンバーを待ち、到着後に乗用車4台一緒に帰途につく。途中、「よっちみろ屋」で本部の坂井さんに御礼と感謝を込めて挨拶をして別れた。予定どおり5時30分ごろにヤマダ電機駐車場に帰着した。

（多田登美子）

図書紹介

第三の極地　エヴェレスト、その夢と死と謎

マーク・シノット著／古屋美登里訳

2023年2月
亜紀書房
四六判　616ページ
3200＋税

1924年6月8日、頂上間近を確信し、エヴェレスト北東稜を力強く進んでいくジョージ・マロリーとアンドリュー・アーヴィン。果たして2人は世界の頂にたどり着いたのであろうか？　もし頂に足跡を残していたならば、1953年、ヒラリーとテンジンが果たした探検史上最も偉大な功績となったエヴェレスト初登頂の快挙の歴史は、大きく塗り替えられることになる。登頂の証明、それは「デスゾーン」に残された2人の手掛かりを発見できるか、否かに懸かっていた。

やがて時の経過とともに埋もれていた謎を解き明かす断片が、徐々に解凍を始める。1933年、アーヴィンのものと思われるピッケルが8530m付近の一枚岩で

発見される。75年には中国隊の王洪宝による古い英国人の遺体目撃証言、そして、ついには99年の英国調査隊によるマロリーの遺体発見。ポケットには当時の所持品が詰まっていたが、残念ながら登頂の証明につながるカメラ（イーストマン・コダック）の発見には至らなかった。

マロリーの遺体発見というセンセーショナルなニュースと映像を私は食い入るように見た覚えがある。強烈な紫外線のデスゾーンにうつ伏せになった遺体。服は破れ、背中は彫像のそれのように硬く青白く光っていたように思う。ショックとともに、もしかしたらマロリーは登頂をしていたのではなかろうか？　遺体発見により現実味を帯びてきた100年来の謎はロマンを引きずったまま、新たな証拠発見の登場を待つことになる。

そして、マロリーの遺体発見から20年。本書の著者であるマーク・シノットがアーヴィン調査遠征隊を組織しエヴェレストに向かう。アーヴィンのポケットに眠っているだろうカメラを発見するために。

本書は2019年に行なわれたアーヴィン調査隊の記録であるが、エヴェレスト登頂の歴史にまつわる事柄を多角的に学べる本でもある。英国山岳会のエヴェレスト遠征の歴史と背景、王立地理学協会に収納されているマロリーとアーヴィンの遺品の存在、エヴェレストに挑戦する人々の「なんのために登っているのか？」に対するそれぞれの人間模様と生き様、また、一大ビジネスと化した現代のエヴェレスト商業登山、そして1960年、北面より初登頂を果たした中国隊の登頂の様子、その政治的思惑、当時の中国と英国の関係までもが丹念に描かれている。

本書によると、調査に対し中国登山協会は、どういう訳か決められた登頂ルートから外れることを許さず。また、高所での滞在時間までも決めてくる。そのようなかでの調査であったようだ。果たして、100年来の謎を解き明かす証拠は発見されたのだろうか？

さて、肝心の調査結果であるが、これは皆さんの方がご存じであろう。もし発見されていたなら、世界のトップニュースで報じられていたはずだから。けれども本書はこれでは終わらない。最後に衝撃的なメールが著者に届く。「75年の中国隊がすでにカメラを回収、フイルムの現像を……」謎は100年を超えて語り続けられるものとなったようだ。

（松田宏也）

会務報告

令和5年度第12回（3月度）理事会議事録

日時　令和6年3月14日（木）19時00分～21時10分

場所　集会室およびオンライン（zoom）

【出席者】橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・望月・原田・猿渡・川瀬・池田・久保田各理事、石川監事

【欠席者】佐野監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・令和6年度事業計画および予算について（久保田、永田、南久松）（賛成14、反対0）

2・財務改善部会の終了について（長島）（賛成14、反対0）

3・個人からの山荘の寄贈を見送ることについて（長島）（賛成14、反対0）

4・山岳研究所利用料金および雇用通知書の改訂について（原田）（賛成14、反対0）

【協議事項】

1・支部連絡会、評議員懇談会開催について協議した（長島）

2・入会届け・退会届けの定型フォーマットの提示について協議した（永田）

3・メールアドレスの収集方法について協議した（長島）

4・ウェストン祭への英国大使の招待について協議した（桐生）

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）
2・事務局員給与の昇給について（長島）
3・国土地理院の外郭図公開について（松田）
4・東京支部設立進捗報告（松田）
5・環境省からのウェストン碑の肖像権についての問合せ（長島）
6・山岳関係組織の優待施設の状況について（久保田）
7・海外登山報告会（YOUTH交流会）について（永田）
8・資料映像委員会講座の報告（飯田）
9・令和6年度年次晩餐会について（長島）
10・AvSAR上級コース報告について（川瀬）

【その他】
1・会報「山」3月号の進行について（節田）

ルーム日誌 3月

1日　記念事業委員会　「山の日」事業委員会
2日　グレートヒマラヤトラバース
4日　資料映像委員会　記念事業

図書受入報告（2024年3月）

著　　者	書　　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
遠山 敦子	富士山と日本人：豊かな「富士山学」への誘い	320p／21cm	静岡新聞社	2024	著者寄贈
市毛良枝	73歳、ひとり楽しむ山歩き	288p／19cm	KADOKAWA	2024	版元寄贈
渡部秀樹	西藏系出雲族の伝説	218p／19cm	集広舎	2024	著者寄贈
両瀬いさお	天空の園 大雪山：神々の遊ぶ庭	180／21cm	共同文化社	2023	出版社寄贈
髙橋大輔	国境の人 間宮林蔵	328p／19cm	草思社	2024	出版社寄贈
大高康正	富士山信仰と修験道	479p／22cm	岩田書院	2013	著者寄贈
静岡県富士山世界遺産センター（編）	富士山学　第4号	80p／26cm	雄山閣	2024	編者寄贈
深田久弥	名もなき山へ：深田久弥随想選/ヤマケイ文庫新編	336p／15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
山と溪谷社（編）	九州百名山地図帳	216p／30cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
橋尾歌子	帰ってきた避難小屋	175p／21cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
日本テレビ総務局広報部70年史担当（編）	日本テレビ70年史：1953→2023	252p／31cm	日本テレビ放送網株式会社	2024	発行者寄贈
日本の名山を選ぶ会（編）	讃山道楽通信	227p／26cm		2013	編者寄贈
永井宝	山岳画の思想的可能性	87p／30cm		2024	編者寄贈

委員会（山岳古道調査）
5日　スケッチクラブ　マウンテンカルチャークラブ
6日　財務委員会　山行委員会
山の自然学クラブ
7日　常務理事会　YOUTH CLUB委員会　山岳地理クラブ　軽登山靴の会
8日　図書委員会　熊野古道　スケッチクラブ
11日　アルパインスキークラブ
12日　フォトクラブ
13日　財務委員会　かっぱの会
山想クラブ
14日　理事会　資料映像委員会
YOUTH CLUB委員会　九五会　道のり山の会
15日　自然保護委員会　総務委員会　学生部
18日　総務委員会　支部事業委員会
19日　総務委員会　つくも会　麗山会　バックカントリークラブ
21日　科学委員会　山遊会
25日　東京支部設立プロジェクト
平日クラブ
26日　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）
27日　三水会
28日　支部連絡会　グレートヒマラヤトラバース
29日　記念事業委員会　軽登山靴の会

3月来室者　311名

会員異動

物故

山口節子（44475）24・3・16
渡辺照人（53348）24・2・11
森下雅幸（97775）24・3・8
甲斐一郎（10793）24・3・2
Binaya GURU－ACHARYA（13013）24・3・11
筧　邦男（13052）24・3・15
小林省三（13449）24・3・11
金　邦夫（14160）24・3・23
富田雄一郎（14828）24・3・14

退会

千葉富夫（6913）岩手
岩城スミ（11183）埼玉
坂井美江（11206）越後
大西　稔（12493）京都・滋賀
森山善弘（12528）
川口廣志（13120）秋田
井上禮子（13523）北九州
坂口弘臣（13699）福井
山岸拓詩（14537）越後
百瀬和元（14824）
児嶋和夫（1484８）埼玉
林田明美（16298）宮崎
岩田春香（16578）熊本
工藤裕章（16778）静岡
鈴木加奈子（16803）北海道
今宿瑛三郎（16984）関西
福井芳隆（6219）信濃
松井二夫（7476）
金成　忠（7873）福島
永田秀樹（8020）
加田勝利（8816）静岡
伊藤尊仁（9206）福島
武田秀男（9746）
堀内拓三（10029）
森　章（10252）埼玉
池田　勉（11668）
沼田敏明（11671）秋田
前盛智恵（12018）山形
亀山　哲（12178）茨城
渡邉　浩（12478）埼玉
植木　信久（12894）
三尾　敦（13076）
渡辺たみ子（13137）
三河くらぶ（13306）東海
坂上弥生（13312）
羽鳥和江（13496）
井上　功（13586）
西田和夫（13601）
川合鉛一（13885）東海
村田正彦（13890）千葉
鎌鹿隆美（14032）北海道
浜田多喜男（14099）
石原裕一郎（14215）
山梨柾巳（14218）
辻美紀子（14229）
伊東美穂子（14399）
宇都宮信夫（14462）熊本
熊谷光子（14491）秋田
築地　茂（14569）静岡
早川和子（14650）栃木
横尾健二（14673）
井上高明（14737）東九州
土屋　勇（15028）
大口恵子（15039）東海
稲崎祥二（15047）
嶌田ちゑみ（15060）東海
田村直人（15134）四国
三嶋　正（15272）東海
伊藤祐幸（15330）東海
佐々木礼子（15417）越後
三枝光吉（15620）神奈川
飯島裕幸（15694）北海道
山中秀正（15709）北九州
玉木　恵（15748）東海
太田彰子（15791）
伊集院智（15805）京都・滋賀
武尾　誠（15874）群馬
髙橋秀夫（15875）
西口　博（15918）関西
中場義則（16071）千葉

宇都宮道人（16106）京都・滋賀
馬島有美（16126）関西
新岡達也（16129）
小山あかね（16297）東海
堀亀　諭（16334）
森美枝子（16456）岩手
田口光江（16598）神奈川
吉澤和代（16621）東海
中村淳史（16653）
古川　健（16690）
亀井郁夫（16729）
中尾理絵（16734）東京多摩
湯浅誠二（16813）京都・滋賀
赤坂優貴（16908）東京多摩
赤坂憲子（16909）東京多摩

6月開催の山岳祭のお知らせ

●ウェストン祭　日本山岳会主催、信濃支部主管

令和6年6月1日㈯　上高地バスターミナル8時30分集合し、明神から徳本峠を往復する記念山行を行なう。碑前祭は6月2日㈰10時、上高地梓川右岸ウェストン広場にて関係者の挨拶、地元安曇小学校児童によるコーラスと記念講演（高橋通子会員）が行なわれる。松本市をはじめ6協賛団体の支援で継続され、戦時中撤去されたウェストンのレリーフ復旧式から今年で78回を迎える、日本山岳会で最も歴史ある山岳祭。問合せ＝古幡開太郎　☎090-1691-0466　✉VEU00522@nifty.ne.jp

●播隆祭　日本山岳会富山支部主催

令和6年6月2日㈰　9時00分、富山市 河内地内の播隆上人の生家跡に集合。

1983年5月8日、富山支部創立35周年を記念して建立した播隆上人顕頌碑の除幕式として開催したのが始まりで、2013年から6月第1日曜日が恒例となる。式典は播隆上人の生家跡の顕頌碑前で行なわれ、上人にまつわる資料展示や元住民の方から講話をいただいている。富山支部では式典後に高頭山記念登山を実施。問合せ＝金尾　☎090-2036-5853、✉ka2na5o1@pf.ctt.ne.jp

岩﨑茂雄（16917）群馬
中村まさ子（16958）石川
宮井秀樹（17001）京都・滋賀
苅部聖子（17012）関西
加藤裕子（17098）広島
田中千鶴（A0316）
菅野丈人（A0338）東京多摩
菅野浅代（A0339）東京多摩
小川将之（A0346）
西中智恵子（A0360）東京多摩
阿部早百合（A0364）
三國志保（A0392）埼玉
船津沙恵子（A0402）広島
石川峰子（A0466）埼玉
中谷茂枝奈（A0496）広島
亀山綾子（A0511）埼玉
中村智子（A0546）東京多摩
新田千鶴（A0577）広島

インフォメーション

◆探索山行―山梨県小菅村における地方再生、登山道管理、古道復活の取り組みを学ぶ

科学委員会

多摩川源流域の小菅村は、森林の3割が東京都の水源涵養林です。景観、森林、水資源を活かし、山村ならではの歴史や文化を守り、源流の里を維持する住民の暮らしを学びます。

日時　6月8日(土)～9日(日)
集合　JR青梅駅改札出口　9時
日程　1日目＝水源林トレッキング（登山道管理、古道復活の取り組み）　2日目＝地方創生ツアー（村内施設巡り）
持ち物　登山装備一式（軽ハイキングあり）、1日目の昼食
宿泊　廣瀬屋旅館（小菅村）
解散　青梅駅前　16時30分
経費　約3万円（借上げバス、宿泊、案内費ほか）
募集　科学委員のほかに10名程度（申込み順）5月8日まで
申込み　木曽雅昭✉kagaku@jac.or.jp　☎090-2536-

７１７０　氏名（ふりがな）、性別、生年月日、会員番号、住所、電話番号を明記

＊申込み者には詳細を連絡します。

◆山岳図書を語る夕べ
山は博物館―尾崎喜八『私の心の山』と21世紀

図書委員会

山では緑が濃さを増し、ヤマボウシやウツギの白い花が目立つ、5月22日（水）、山岳図書を語る夕べを開催します。

今回は信濃支部長も務めた山の詩人、尾崎喜八さんの自然科学に対する造詣や興味、さらにご家族にまつわる話を、尾崎さんの孫である石黒敦彦さん（詩人・サイエンスアート研究者、尾崎喜八生誕１３０年記念事業代表）に語ってもらいます。日本山岳会会員の知らない尾崎さんの一面を深く掘り下げた話が聞ける貴重な機会ですので、皆さんふるってご参加ください。なお、山岳図書を語る夕べと謳ってはいますが、山の話はほとんど出てこないかもしれません。しかし、それだからこそ尾崎さんの人となりを浮き彫りにできるのではないかと期待しています。

日時　令和5年5月22日（水）18時半から20時半ごろ

会場　日本山岳会ルーム（１０４）

申込み・問合せ　日本山岳会　図書委員会　☎03-3261-4433　✉yabuyama_hg1486.99@Jcom.home.ne.jp

◆ＧＯ ＴＯ山岳祭　高頭祭＆弥彦山たいまつ登山祭への参加と越後の名峰・守門岳登山

山岳祭プロジェクト／山行委員会／国際委員会

今年度の高頭祭（弥彦山たいまつ登山祭併催）は、アジア山岳連盟（ＵＡＡＡ）30周年記念イベント事業として開催されます。日本山岳会も協力することになり、海外交流を兼ねて参加した後、越後の名峰・守門岳登山を計画しました。

期日　7月25日㈭～27日㈯の２泊３日

集合　7月25日11時までに上越新幹線・長岡駅東口ホテルニューオータニ長岡ロビー

行程　7月25日＝長岡―弥彦山大平園地（高頭祭）―奥の院（山頂祭）―弥彦神社本殿（たいまつ登山祭行進）―長岡　26日＝午前中長岡市内観光（酒蔵見学など）、15時ＵＡＡＡ30周年記念式典、18時記念祝賀会　27日＝オプショナル登山守門岳（越後支部会員が引率ガイド）長岡―保久礼登山口―守門大岳（歩程４時間）―長岡駅（登山に参加しない場合は朝食後解散）

費用　３万３０００円　ホテルニューオオタニ長岡２泊朝食付、域内移動交通費、記念式典・祝賀会参加費、市内観光移動費などを含む。長岡までの交通費は各自、守門岳登山は別途バス代（約２０００円）

募集　目標50人

申込み　6月20日までに、山行委員会・長島泰博（☎０９０－５５５４－８３４５、sanko@jac.or.jp）

＊オプションの守門岳登山の参加の希望について連絡ください。なお、アルピニズムクラブなどグループで参加する場合は、グループでまとめて申込みください。

＊申込み受付後、参加者に詳細資料、参加費振込依頼書を送ります。

❖編集後記❖

●「対馬の嶺は下雲あらなふ可牟の嶺にたなびく雲を見つつ偲はも」――本会報９１７号の「島の山旅への誘い」に惹かれて3月下旬、対馬に行ってきました。万葉集に詠われた「対馬の嶺」に比定される有明山は、一等三角点の山にふさわしい爽快な山頂でしたが、「たなびく雲」ならぬ黄砂の襲来で霞んでいたのが残念でした。

●もちろん対馬を代表する霊峰の白嶽にも登りましたが、最も印象的だったのは金田城が築かれた城山です。「白村江の戦い」で敗れた後、大和朝廷が国防の最前線として築いた山城ですが、城戸や石塁などの遺構とともに、東国から召集されてきた防人たちの住居跡も発掘されており、万葉の歌とともに涙を誘いました。（節田重節）

日本山岳会会報　山　947号

2024年（令和6年）4月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社